

第二十節 小山内薫の急逝と文壇・劇界の哀悼

築地第五年にあたる昭和三年暮には、創作劇重視との観点から上田文子作『晩春騒夜』および北村寿夫作『当世立志伝』が上演された。その年長谷川時雨主宰の雑誌『女人芸術』に発表された『晩春騒夜』一幕は、わが道を進む女流画家を主人公とし、「みずみずしい青春の情感に満ちあふれ」、「一種の気品と格調を備えた作品」である。また三幕にわたる『当世立志伝』は、同年の五月より七月まで『劇と評論』に連載された。立身出世術を戯画し、資本主義社会の内実を暴露するこの社会劇は、「才気煥発、発想奇抜な作者の稟質をいかなく発揮した代表的佳品」と評される。①

築地小劇場第八十一回公演 配役

昭和三年十二月五日―二三日 毎夕五時半（日祭昼夜二回）

上田文子作『晩春騒夜』一幕

讓||友田恭助 香代子||山本安英 光子||村瀬幸子 静子||滝蓮子

① 大山功著『近代日本戯曲史』近代日本戯曲史刊行会、一九七〇年。第三卷（昭和篇）、四一六―四二〇、五一三―五一九頁。

演出||北村喜八 装置||伊藤熹朔

北村寿夫作『当世立志伝』三幕七場

指南所の先生||友田恭助 事務員||小宮讓二 伯爵夫人||東山千栄子 その令嬢||飯島綾子
ある男||伊達信 乞食の頭||島田敬一 乞食||志水辰三郎・三浦洋平・新見勇 伯爵||汐見洋
富豪||丸山定夫 書生||伊藤晃一 小間使||村瀬幸子 富豪の妻||高橋豊子 富豪の息子||楠田清
写真師||小宮讓二 女中||杉村春子 無頼漢||小杉義男 職業婦人||山本安英 新聞記者||大川大三
客||東屋三郎・新見勇・島田敬一・三浦洋平 小僧||小宮讓二 芸者||月野道代・細川和歌子
姐さん||滝蓮子・杉村春子 弁護士||新見勇
演出||土方与志 装置||吉田謙吉 照明||神尾耕二 効果||和田清 監督||水品春樹 ①

当年度の公演を完遂した二四日、劇団では決算報告と次年度打合せを済ましたあと、クリスマス・イブを兼ねて銀座裏カフェ・リッツで忘年会が催される。その翌日小山内薫は慰労会の宴席で倒れ、四九歳で急逝した。② 築地小劇場への発起から一心同体となって献身した土方与志は、小山内の永眠と最後の日々について、左記のとおり告知する。

① 水品春樹著『新劇去来―築地小劇場史（復元）その他』一八六―一八七頁。

② 同書。九六頁。

土方与志「謹んで小山内薫先生を追悼す」

小山内先生は、一昨年暮ソビエト・ロシア革命十周年式典に列せられて帰朝後、一度三月十六日自宅において昏睡状態に陥られ、その回復後動脈硬化症に対しての十分の療養に努められつつ、なお劇作に批評に、また築地小劇場の首脳者としてその事業に演出に活動されつつ、ついに昨年十二月二五日午後七時半頃、『晩春騒夜』上演の為の上田文子氏の偕楽園における招宴席上で、急に病を發せられ、夜半四谷南寺町の自宅に於いて永眠された。

小山内薫先生はその日の一日前、築地小劇場忘年会に列席され、築地小劇場員一同とともに十二月公演を合評し、また来年の築地小劇場について多く語られ、またこの日兵役を終えて、再び築地の舞台に帰った滝沢修君の歓迎と『当世立志伝』を最後として退場する伊達信君の送別を兼ねて、この小宴を愉快に過ぎた。この日先生は天鵝絨の乗馬ズボンを穿き、ロシア製長靴を穿ておられたが、先生の病氣を知る私には、その元氣を喜ぶ気持と同時に、その服装によって想像される先生の平常以上の活動を思つて、いささか不安が感じられた。

その翌日は先生の三男喬君の誕生日に當つていたので、クリスマスを兼ねて自宅に於いて祝いの午餐を執られ、その席で元氣に外国の唄などを歌われたとのことである。その日午後四時頃、築地小劇場演出部に於いて、氏の担任であつた三月の創作劇の出しものについて、一九二八年度の創作戯曲を正月号の諸雑誌に現れた戯曲についての批評とその演出に対して相互に意見を交わした。先生は間もなく偕楽園に向われ、私は

芽生座の入れ込みを見て帰宅した。

先生の重態を知つたのはそれから僅かに一、二時間後のことである。この時偕楽園に同席していた北村喜八、友田恭助、山本安英、村瀬幸子、滝蓮子の諸君は、上田文子氏およびその令兄とともにあらゆる応急の手当を尽くした。即刻、芽生座の初日の為に築地小劇場におられた夫人、小山内喬君、岡田八千代氏その他築地小劇場員を始め、自宅から小山内徹・宏両君、各所から主治医芦原信之氏、稲垣敏澄氏、水上滝太郎氏等々が駆けつけた。急を聞いて私も直ちに馳せ参じたときは、一同の手によって忙しく人工呼吸が施されていた。遂に再び小山内薫先生の声咳に接することは出来ないのであつた。

十二月二八日午後二時から四時まで告別式を執行し、翌二九日多磨墓処に埋葬するまでの間、ただ夢の如く過ぎてしまつた。①

『晩春騒夜』を書いた上田文子、後の小説円地文子は高名な国語学者上田万年の次女である。名著とされる共著『大日本国語辞典』全五巻も昭和三年に完結した。同年の沈痛なクリスマス夜については、六十年後文子最後の著書に記載が見出される。

① 『築地小劇場』第六卷第二号Ⅱ小山内薫号（昭和四年二月）、九頁。

土方与志「謹んで小山内先生を追悼す」『演出者の道―土方与志演劇論集』未来社、一九六九年。三六九頁。

『十二月二五日の晩』（円地文子著『夢うつつの記』）

小山内先生と演出の北村喜八氏、それに山本安英、村瀬幸子、滝蓮子、友田恭助などの出演者を招いて日本橋亀島町の偕楽園で小宴をはった。父がそうしろといったので催したのであるが、「おれが行っては、固苦しくなるから」と言って、父は私の兄を代理によこした。十二月二五日の晩であった。偕楽園は谷崎潤一郎先生のお友達だった笹沼源之助さんの経営していた中華料理店で、当時の東京ではいい店に数えられていた。

そこへ集まったとき、小山内先生はいつものように、裏に毛皮の付いた厚いオーバーを着ていられたが、先年ソヴィエトに招かれて行かれたあと、ずっと健康が勝れなかったもので、そのときも顔色が悪かった。・・・二、三品食べ物が出る頃までは普通に話していられたが、突然胸が苦しいといって、「水を持って来てくれ」と頼まれた。山本さんや村瀬さんもびっくりして、すぐに店の人を呼んだり、笹沼夫人も先生と旧知の仲なので、直ぐに氷が運ばれてきて先生の胸に当てた。

「お医者さんと呼ばなければ」、「お宅へ知らさなければ」などと騒ぎ立っているうちに、だんだん胸の辺りが苦しくなって、たぐるように喉をもんで苦しんでいられたが、それもほんの十分とかからないほどで、喉元へ突き上げてくるなにかが、ぐっとつかえてくるのと一緒に、ぱたりと倒れてしまわれた。それが最後だったのである。

夫人やまだ小さかった御子息たちが駆けつけて来られたし、築地小劇場の人たちもみんなやって来た。「ともくこのことは明日まで伏せて置いて下さい」と土方与志が言われた。私はその晩はそのまま家へ帰ったが、

祖母が八一歳で眠るように死ぬのを見たほかは、誰の死にも会っていなかったので、そのとき受けたショックは大変激しかった。①

急逝に至る小山内薫の病状について、医家芦原信之の談話が遺される。二年前ソビエト旅行に出発する以前から、すでに小山内の体調は憂慮すべき状態にあった。死期を早めたのは、使命感に貫かれた演劇人の過労である。

芦原信之（談）「主治医として」

小山内薫氏は一昨年ロシアへ出発の際、既に感冒に罹り、続いて気管支カタルを起して咳嗽を頻発していました。ロシアに着いてからも、かなりの疲労にもかかわらず、多忙のため休養することもできず、そのまま長途の汽車旅行を続けて、東京に帰って来られました。爾来気管支カタルが継続し、咳嗽が常に止みませんでした。昭和三年に至り、気管支カタルは逐次軽快になっていきましたが、その前後から血圧が増進し、心悸亢進、腕部の圧迫狭窄感や不眠症も加わって、漸次動脈硬化症の症状を起して参りまして、レントゲン検査の上では、心臓の肥大をも発見しました。その後胸部の苦悶、心臓狭窄不眠症状を起される事しばしばでしたが、その症状は一進一退し、七、八月の候にいたり、やや軽快せられました。しかし、執筆を継続し、外出の度数の増す場合は上記症状を増加するのが常でした。こう云う具合で十、十一月と経ました。

氏自身でも、頻繁に外出し、長時間執筆を続ければ、心悸亢進やら胸部の苦悶を覚え、著しく疲労不眠症状を發することを自覺して、みずからも一段と養生を加えていました。

こういう發作が度々ありましたので、私は医師として嚴重に外出を制限しました。左団次がロシアへ行く際にも、氏は行きたい希望を持っておられましたが、これは絶対に反対しました。その以前から全然書齋生活に入る事を勧告しました。

がしかし、氏は極めて多方面に活動しておられたので、なかなか私の意見を用いず、築地小劇場の事なども献身的に尽くしておられました。主治医としては、あくまでも静養を強制致したかったのですが、私が自分の仕事に専心せらるのには、いわば軍人が戦場に立つようなものですから、軍人であり医者である私も、絶対とは止める訳には参りませんから、ある程度まで妥協したのであります。

逝去前の四、五日はほとんど毎日外出していた事を、後になって知った私はどんなに驚いたでしょう。偕楽園に於いて起った發作も、心臓部の苦悶の症状が強かったためでありました。①

築地の幹部は土方与志邸に集って善後策を徹夜で協議し、遺族近親の同意を得て仏式による劇場葬と決した。十二月二八日午後一時より葬儀、二時から告別式が行われる。「多くの名作が演じられたステージの中央には、故人の写真が飾られ、〈故小山内薫の靈柩〉と書いた文字は、各劇場、各劇文学関係者、各雑誌社から贈られた

① 『築地小劇場』第六卷第二号＝小山内薫号（昭和四年二月）、七頁。

無数の花輪のなかに痛々しく浮き出ていた。故人の心の殿堂であった小劇場を式場にあてたことは、ひとしお会葬者の心をうった。」やがて金谷山宝禅寺秋山曉道師の読経について、青山杉作が代表として靈前に進み、築地関係者八十名が起立しつつ、弔問朗読が始まった。①

追悼文

築地小劇場員一同

小山内薫先生

築地小劇場は、先生の二十有余年に亘る劇壇生活の最後の活動であり、最後の業績でありました。創立以來四年有半、朝夕先生の声咳に接して嚴父の如く仰ぎ見、慈母の如く慕っていた吾々八十余人の同志は、ここに先生の死に面して、愕然として為すところを知らなかったのであります。

顧みるに先生は、新鋭の氣を負うて劇界に投ぜられて以來、常に時代の第一線に立って、創作に翻訳に演出に評論に不斷の努力を重ね、日本演劇界の先覚者たる光輝ある使命を果されたのであります。その晩年築地小劇場の分裂に挾って後は、半生の間に蓄えられた該博な知識と豊富な経験とを傾倒し、永遠の若きときぎざる精力を以て、内外の名作を演出せられること四五篇、エリザベス朝の古典より世界大戦後の新傾向まで包含して余すところなく、今や先生畢生の念願たる国劇樹立の緒に就かんとする時、湍^{こうえん}焉として世を去られたのであります。先生の懇切な御指導の下に専心演劇研究に精進しつつあった吾々は、この俄の悲しみに

遭って哀悼痛惜の念に耐えません。

吾々築地小劇場員は、今日先生の御遺骸を吾々の戦い守った築地の舞台に安置して、心からなる追慕と心からなる感謝を捧げます。この舞台こそ、先生が親しく吾々を指導し、吾々を鞭撻せられた思い出の道場があります。この舞台こそ、亡き先生の靈魂の眠る永遠の祭壇であります。先生の颯爽たるお姿は、今なお彷彿として吾々の眼前に浮び、先生の凜然たる御声は、今なお朗々として吾々の耳朶を打ちます、しかも吾々は永久に、幽明境を隔てた先生の温容に接する事が出来ません。

小山内先生　しかし吾々八十余人の同志は、先生の遺志をほうじて、最後の一人に至るまで、吾々の本城たる築地小劇場を守る覚悟であります。ここに先生の霊前に吾々の決意を誓って、哀悼の詞に代えるものがあります。

昭和三年十二月二八日

築地小劇場員一同

①

弔問朗読が始まると、参列者席のそこからすすり泣きの声が聞えた。「島崎藤村も馬場孤蝶も水上瀧太郎も秋田雨雀も、京都から急行で駆けつけた谷崎潤一郎も水谷八重子も、それからみんな泣いた。」つづいて劇壇や文壇からの弔辞にうつり、松竹や帝劇の各代表をはじめ、文芸家協会の長田秀雄、三田文学の久保田万太郎、新劇協会の畑中夢坡、左翼劇場の小野宮吉、新思潮の青江舜二郎、芽生座の伊藤基彦、劇と評論の北村寿夫等が

① 『築地小劇場』第六卷第二号＝小山内薫号（昭和四年二月）、四頁。

霊前に進んだ。

弔辞を捧げた長田秀雄は雑誌『明星』の同人であったが、自由劇場の開始に啓発されて戯曲に専念する至る。吉井勇および木下杢太郎の作品とともに、彼の処女作『歡樂の鬼』は同劇場第三回試演に組まれる。大正五年反戦思想を秘めた抒情的な『飢渴』で評価を高め、三年後新劇協会による『轢死』の舞台には友田恭助や伊沢蘭奢が立った。①

長田秀雄「小山内氏を悼む」

小山内氏の死は、まったく突如として来たと云う感じである。なるほど昨年の初めから身体の調子が悪くて、よそ眼にもいたいたしい位、やつれては居られたが、しかし生命の最後の極限が、既に既にもう同氏の背後に迫って来ていようとは、我々には信じられなかった。もともと、普通の人が、あの何となく陰の薄いような衰えかたをして居たのなら、或いはもう長くはないなと思うかもしれないが、まだまだ小山内氏の前には将来の仕事が、沢山残っていただけに、そして全身的にその仕事に熱中して居られただけに、ああ云うあつけない臨終が来ようとは、夢にも思えなかった。

朝、新聞紙上に小山内氏の訃を見出したとき、私は烈しい感動に襲われた。他人の死によってこんな感動を得た事は、近年まずないと云っていい。―とりあえず私は服装を更めて、同氏のお宅へお悔やみに伺った。

① 大山功著『近代日本戯曲史』近代日本戯曲史刊行会、一九七〇年。第二卷（大正篇）、四〇六―四一一頁。

お悔やみと云うより、事実を確かめる気持のほうが、濃かったようだった。

御子息と夫人の許しを得て、顔にかけた白い布を取ったとき、そこに、蒼白い生前と殆んど変わらない小山内氏の顔を見出した私は、胸を締めつけられるような心持になって、やうやく涙を押える事が出来た。

御懇意を願って、既に二十年いろいろな意味で指導された長い生活が、思い出された。今は知る人も少ないが、私が劇界に出る事の出来たのも、云わば小山内氏の御陰である。自由劇場第三回の試演に、秋田君、吉井君の戯曲と一緒に、私の処女作『歓楽の鬼』を上演して下さったのが、私の劇界に名を連ね得た最初の業績であつたのである。

今、振り返ってみると、小山内氏の演劇に対する情熱は、殆んど超人間的だったと云っていいと思われる。その情熱はいろんな業績となって現れた。―私はここに、頭を低く垂れて、故人に尊敬と感謝の気持を捧げる。①

大正四年より新劇興隆の足跡を刻印する『秋田雨雀日記』は、大正二年演劇人のソビエト訪問についても詳しい。同年十二月十三日モスクワにて「今日は小山内、尾瀬二君が日本へかえるのでいそがしそうだ。」「夜十時、小山内、尾瀬二君をステーションに送った。雪がかなり降って来た」この日記は翌年五月ソビエト滞在中に中断

① 『築地小劇場』第六卷第二号、五頁。

し、半年後再開された一月一日付で「昨年は小山内薫君を失った。」と誌される。① 秋田による追悼文もまもなく『築地小劇場』に掲載された。

秋田雨雀「最近の小山内君」

去年モスクワのホテルで十九日間一緒にいたことがあり、メイエリホリドやスタニスラウスキのところにも一緒に行ったことがある。その当時の小山内君の姿が私の頭を強くうつ。小山内君はモスクワでは日本の最も大きな演出家としてあらゆる劇場人に尊敬されていた。スタニスラウスキは自分若い弟子として、又メイエリホリドはスタニスラウスキの相弟子として小山内君を誂んでいた。

然し、それにも係わらず、この若い演出家は肉体的に非常に衰えていた。例えばメイエリホリド夫妻や有名なイリンスキイなどという俳優たちの大勢並んでいる研究会の席上でも、ややもすると小山内君は時々居眠りしたりしたので、私達はハラハラしたことがあった。それ程小山内君の肉体が衰弱を来たしていた。私は私の友人と一緒にモスクワを去る時に、小山内君の健康を祈った程であった。

小山内薫という人の一生は日本の芸術の歴史では先駆的な位置を占めているのであって、ロマンチズムの最後の波の中に眼を開いてナチュラリズムの運動に参加し、舞台の上のナチュラリズムの運動を完成して最後に形式破壊の芸術に自分の仕事を手渡しして、その生涯を終えたものと云っていいであろう。

私は小山内君の一番最初の仕事と云っていい第一期の『新思潮』には島崎藤村の紹介によって仕事の一部を手伝ったことがあり、自由劇場時代には若き友人の一人として影ながら声援した。そして築地小劇場の仕事に対してもまた友人としてこの仕事の成功を祈っていた。『新思潮』の功績はロマンチズムの文学の精算時代ともいべきもので、この雑誌には与謝野鉄幹氏が最後のロマンチズムの筆を執っていたと同時に石川啄木が新しい時代の暗示をしていた。

『新思潮』に執筆した小山内君の作物はチェホフの翻訳であったと記憶する。自由劇場の運動はこの仕事の直後に興ったもので、この運動はいうまでもなくフランスの自由劇場や、ロシアの芸術座の運動に刺激されたのであって、日本の芸術運動に於ける自然主義的活動が舞台に移ったのである。例えば『ボルクマン』『寂しき人々』『夜の宿』の上演は私達の時代に対して非常に大きな刺激を与えた。

単に西洋演劇移植の形態としてそれが現れたばかりでなく、創作劇の上演は日本の若い劇作家の運動に刺激を与えて、新しい作家を沢山に産んだ。今日の劇作家でこの運動に刺激されないものは殆ど一人もないと云っていい位である。

築地小劇場の事業は今日なお進行中であって歴史的な事実として語ることは出来ないが、の事業の中で小山内君の分担した方面の業績はややはっきりしている。小山内君の監督によるものとしてはチェホフもの及びゴルキイの『夜の宿』そして最後にはかなりの輿論を喚起した新しい試みの一つであった『国性爺』などであろう。チェホフや『夜の宿』は舞台上自然主義の運動の継続と見ることが出来るであろうし、作物としての『国性爺』の試みは近來の芸術形式の一つである、スペクタクル的、またある意味において日本演劇のレビュー的試みと見ることが出来るものであろう。土方君の演出と相まって、あきらかにメイエリホリド

的手法の影響を見ることが出来る。

この最後の形式破壊の試みが意識的か無意識的かに、小山内君をソビエト・ロシアにおけるメイエリホリドの位置にやや似たところへ連れて行っていることも、不思議な感じを与える。ただし、ソビエト・ロシアに於けるメイエリホリドの位置は、健全な劇場の左翼運動をもっているのと異っているだけである。

日本では小山内君の左の運動は、検閲制度のために非常な打撃を加えられて、頭を擧げることが出来ないで、しかも中間の位置になる最後の偉大な芸術家として埋もれたのである。この点でも日本の演劇はソビエト・ロシアのそれに比較して、非常な不幸の中に置かれるものだ。

築地小劇場の仕事は恐らく健全な発達を遂げるであろう。然しこの損失は現実として大きな損失であるに違いない。①

『当世立志伝』の作者北村寿夫は、小山内薫の指導を受けて大正十三年に処女作『幻の部屋』を発表した。多くの戯曲を製作したのちラジオ・ドラマに転じ、第二次大戦後はシリーズ『新諸国物語』でとくに知られる。

北村寿夫「恩師小山内先生」

十一月六日の本読みの日、築地の休憩室で先生は、上田君と私を座員の方々一同にみずから紹介して下さい

いました。私は先生によって大勢の人たちの面前で紹介してもらったのが、これで二度目です。一度は処女作『幻の部屋』を改造社から出した時の千匹屋楼上の出版記念会でした。私としてはこの名誉をいつまでも忘れることができないでしょう。・・・

あとから高橋邦太郎君にききましたが、なくなる前晩リッツの伊達信君の送別宴の席上で、先生の口から『当世立志伝』の批評が出たことを聞きました。「欠点はかなりあるが、上演してみると、予期した以上の凄みが出ている。この点この作者を買う」という事を言われたそうです。「君は幸福だ。先生のこの言葉は最高の称讃だよ。先生に舞台を見て頂いた事だけでも仕合者だ。」と高橋君は言ってくれました。私は何とも言えない心待ちでその晩、眠れませんでした。ともあれ、私個人としては『当世立志伝』を上演して頂いた直後の出来事ではあり、何だか置土産をして頂いたような気がして感慨無量なのです。

私はまだ小さい小さい名しか持っておりません。が、ともかくそれなりに今日まで来たことを考えてみると、全部が全部、先生のお蔭であることを立証できるのです。なにしろ初めて先生にお目にかかるまで、文字通り戯曲の戯の字も、書き方も知らなかった私でしたから―私は昔、先生のところへ行かない前は、小説家になりたいとばかり考えていたのですから。①

① 『築地小劇場』第六卷第二号、八頁。

築地小劇場上演に選ばれた唯一の女性作家上田文子は、小山内薫の講演と人柄に惹かれ、戯曲家を志した。①
処女作『晩春騒夜』のあといくつかの戯曲を制作した彼女は、第二次大戦後小説に転じ、『女坂』、『妖』等々の作品で代表的な女流作家のひとりとなる。

上田文子「先生をおもう」

今日は正月七日―小山内先生御逝去の不幸な日から数えて、ちょうどもう二週になる。と思うと、時の経過の遅いような早さ、早いような遅さに今さら惑わずにはいられない。不思議だ。全く夢の様な気がする。しかし、今日から十四日前に、小山内先が現世を去ってお仕舞いになった事は、どうしても変えることのない事実なのだ。いくら泣いても呼んでも、先生は再び私達の前に姿を現しては下さらない。―千里行っても二千里行っても、私達の住む地球の中に再び先生を見、先生のお声を聞くことは出来ない。現し身の先生は永遠に私達を去ってしまったのだ。・・・

私の心が淋しい悟りめいた気持ちに落ちていくように見えたのは、御逝去後の三、四日を全く悪夢のようなめまぐるしい悲しみの中に過ごして、桐ヶ谷の火葬場に御遺骸を送ったあの光のない、救いのない暗夜の翌朝、多摩の墓地で挙行された先生の埋葬式に列した時であった。御逝去後五日―そのひ初めて私はわずかに「先生」を「亡き先生」として肯定することが出来たのであった。・・・

① 〔参照〕円地文子著『朱を奪うもの』講談社、二〇〇九年。七二―七六、八〇―八二頁。

「屍は土に帰し、魂は点にかえる。」そんな古い言葉の意味が、しみじみ私の心に味われた。私は白木の墓標を眺め、振り返って松群の上に澄んだ空を仰いだ。そして、その時先生の心が、浅緑の空高く微笑していらっしやるのを幻に描いた。復活の様だ。十字架の後の復活の様だ。私はマグダレナが春の暁に見た奇蹟を、多磨墓地の冬の嵐の荒れ狂う中に感じた。前に言った悟りめいたすがすがしさが、私の内に入って来たのはそのときであった。①

これら小山内への追悼文が多数あるなかでとくに感慨深いのは、市川左団次と島崎藤村による哀惜である。自由劇場の盟友左団次との出会いは、小山内の生涯においてとりわけ重要な出来事であった。築地小劇場への参加を固辞しつつ、独自の活動を続ける左団次は、本郷座において大正十五年に池田大伍作『凱旋將軍』、昭和二年は岡本綺堂作『新宿夜話』を提供し、新歌舞伎の声価を高める。昭和三年にはソビエト政府の招請を受け、左団次一座四八名を率いて、モスクワで『忠臣蔵』や『番町皿屋敷』を公演。② 帰国して三ヵ月後、彼の小山内追悼は『演芸画報』昭和四年二月号に掲載された。

市川左団次「小山内薫氏の思い出」

① 『築地小劇場』第六卷第二号、一六頁。

② 市川左団次著『左団次芸談』南光社、一九三六年。一六一―一九五頁。

私の親友として一番懐しい、忘れる事の出来ないのは、小山内氏であります。たしか私の十八才位の時でありました。私は一高在学中で、御親父の跡を継ぐべく、医者への志を立てて居られました。その当時雑俳が流行して居りまして、氏も私もそれをやって居りました。二人共にその師匠が、かの鶯亭金升でありました。で、自然師匠の宅で落ち合うことが、度重なり、交際を結びましたが、今日にいたるそもそもありました。それからほど経て、四、五年は親しく逢う機会がなくて、互いに文通で交際を続けて居りました。その後氏は帝大へ入学せられましたが、「中途心を翻して劇界へ進まれ、当時の新派（伊井氏的一座）へ見学に行つて居られました。私が最初の洋行を致しますに先立って、種々注意やら、案内を聞きに参りました所、氏は何くれとなく、親切に教えて下さいました。御陰で大したお笑草にもならず、無事帰朝しました。帰朝後の明治座の大改革を行った時、いろいろな事情の下に大難局に遭遇しました。その折なぞは非常に同情を寄せられて、私の片腕以上に成つて下されたことは、深く感謝いたしております。なお氏の思い出話として閑却出来ないのは自由劇場であります。たまたま雑談の折に、何か一つ劇界に波紋を画こうではないか、僕は狂言の事に当たる、君は俳優であるから、役者で行こう、と云つて生まれたのが自由劇場そのものであります。先年帝劇で公演致しました『信仰』が最後で、中断しております。そのうちにまた始めようと云つて居りましたが、小劇場の方が多忙であられた為、二つには健康を害して居られた為に実現できず、惜しいかな、いまは早や黄泉の客と成られ事を悔まずには居られません。親友の一人永井荷風氏を私に御紹介くださったのは氏であります。氏に対する思い出話はなかなかこの位の事では尽きませぬが、紙面を許さ

ず、残念ながら――終りに臨み、早逝された氏の冥福を祈って居ります。①

小山内薫を哀悼する島崎藤村の談話は、昭和四年一月六日『読売新聞』に掲載された。その二年前飯倉片町に住む五七歳の彼は、大作『夜明け前』の準備に着手。翌春には飯田・木曾福島・馬籠へと旅して、『大黒屋日記』など多くの史料を探索した。同書の第一部は昭和四年四月より昭和七年一月まで『中央公論』に連載される。②

島崎藤村（談）「小山内薫君」

私は小山内君のもっとも古い友達の人であると思う。そう云う永いおなじみの間、ずっと君を見守って来た。その自分はこの突然な私を聞いて、自分の驚きを云い表すべき言葉を持ちません。何をさておき、小山内君を失ったことは私にとって非常にさびしい。

一体小山内君は人の中へでも入っていかれるような不思議なところがありました。それは誰とでも調子を合わせて行くような八方美人ではなくて、むしろその反対に才能のある人に珍しい誠実と情熱とを備えていた。殊にいろいろな性質の異ったでも理解すると云う、力があつたからだと思う。・・・

そう云うめずらしい性質を持った人が、強い研究心と根気と天性の誠実をもって、君が好める劇の方に向

① 水品春樹著『小山内薫と築地小劇場』二四八―二四九頁。

② 『藤村全集』筑摩書房、一九六七年。第一七卷（書簡・年譜）、四四八―四四九、五七一、五〇七頁。

つたということは、混沌とした劇団の為に幸福なことであつたと思う。ロシアの芸術座をはじめ、最近の劇の運動に理解を持ち、一方にはドイツに起りつつあつた劇の運動にも興味を持ち、我国の古い歌舞伎まで見なおそうとすることなどは、小山内君にして初めて出来た。

私が初めて小山内君を知つたのは、信州の山の上に暮している時分です。有島生馬君、画家の青木・君など前後して小諸の草葺きの家に訪ねて来て呉れた。その頃の小山内君は帝大の文科の学生で、『七人』と云う雑誌を出される前であつたと思う。学生ではありましたが、立派な見識を備えていて、初めて来られた時から愛すべき性質に、たちまち心を傾けてしまいました。それから小山内君が初めて直接に劇場に関係されたのは、伊井蓉峰の一座に關係が出来て、まだ中洲の真砂座に通われたことを覚えています。後になって左団次などと互いに知り合うようになってから、さらに劇の方に深く入るようになったが、一番最初は伊井蓉峰のむすびつきであつたと思う。

私が信州から東京へ出て来たときに、私の『破戒』を脚本に書きなおして、真砂座の舞台上演して、その時初めて井上正夫と云う熱心な俳優のあることは、小山内君の紹介に依って知つたのであるが、小山内君の書いたもので初めて舞台上演されたのは、あれが最初であつたかと思う。やがて私は浅草新片町に移りますむようになつて、小山内君は近い瓦町の方に引越してこられて、互いに近かつたので、よく往来しました。小山内君の自由劇場と云うのが形をとるまでに、どれほど熱心な研究をつかれたかと云うことは、私もよく知つてゐる者の一人だが、あの自由劇場の最初の試演に、何を選んだらよからうかと云う相談がありまして、その時小山内君は私のすすめを入れて、イブセンの脚本の『ボルクマン』を上演しました。小山内君は自由劇場の最初の試演の晩に舞台上立つて、自由劇場の主意を述べたことは、未だ私の眼についてゐる。・・・

ロシア、ドイツ、イギリス、フランスの方を劇研究の為に漫遊されてからは、一層その見識も高いものになったらしい。ちょうど私は大正二年にフランスの方に出掛けていて、パリの天文台付近の下宿で一度君を迎えました。その時君はいろいろな土産話を持って私の宿へやって来られたが、あの時は外国の旅のこともあり、互いになつかしい思いがしました。ちょうどパリはロシアのバレエで名高いニジンスキーの一座が来て、女優のカルサビナを相手にマラルメ原作『フォオンの午後』などを演じている時でした。その時はまたと得難い時でしたから、一緒にそろって出掛けましたが、小山内君は前の日に自分で切符を買いに行き、呉れるような面倒までみて呉れた。そして割合に安い場所に陣取って二人で見物しました。・・・あの旅から帰ってから、君のめざましい働きは、今さらここに云うまでもないことです。今年の夏馬場孤蝶君の六十歳を祝する為に、水上淹太郎さんや久保田万太郎君などと集まって、旧知の者ばかりで久しぶりに話しましたが、その時小山内君も見えて、ロシアの土産話などをみなで聞きました。小山内君は左団次の一座と一緒に行くところでしたが、私達でロシア行きを止めました。あれが、私の見た最後のときでした。今になって思うと、同君の死は実に突然のようであるが、前から自然と健康をそこねておられたように思われる。①

小山内薫の功績を称えて劇団築地小劇場は、昭和四年一月下旬各地において追悼地方公演を実施し、さらに同

① 島崎藤村「小山内薫君」(『藤村全集』第十三巻、三二五―三二七頁)

年二月および三月東京で追悼公演を行った。『夜の宿』と『桜の園』は小劇場の定番であるが、さきに禁止となつた藤森成吉作『犠牲』が、地方公演の演目に敢えて含まれる。

小山内薫記念追悼地方公演 昭和四年一月下旬

二十日	夜	青山青年会館	『犠牲』一幕上演
二十一日		大阪放送局より	『犠牲』放送
二二・二三	午後	大阪朝日会館	『夜の宿』四幕
二四・二五	午後	京都岡崎公会堂	『夜の宿』四幕
二七日		名古屋放送局より	樋口一葉作『十三夜』放送
二八・二九	午後	名古屋新守座	『桜の園』四幕

小山内薫追悼公演 昭和四年二月・三月

築地小劇場第八三回公演 『桜の園』三幕

二月二日より二一日まで二十日間 毎夕六時・日曜昼夜二回昼一時開演

築地小劇場第八四回公演 『夜の宿』四幕

三月五日より二四日まで二十日間 毎夕六時・日曜昼夜二回昼一時開演

小山内薫追悼公演『夜の宿』(原名『どん底』) 配役

木賃宿の主人Ⅱ東屋三郎 その妻Ⅱ東山千栄子 妻の妹Ⅱ山本安英 巡査Ⅱ島田敬一
ワシカペオエルⅡ薄田研二 錠前屋Ⅱ楠田清 その妻Ⅱ岸輝子 その娘ナスチャⅡ田村秋子
饅頭売の女Ⅱ高橋豊子 帽子屋Ⅱ三浦洋平 サチンⅡ青山杉作 役者Ⅱ友田恭助 男爵Ⅱ汐見洋
巡礼ルカⅡ丸山定夫 靴屋Ⅱ小杉義男 人足Ⅱ小宮譲二 警部Ⅱ澄川久 クレシチⅡ瀧沢修
同宿人Ⅱ杉村春子・村瀬幸子・月野道代・細川和歌子・滝蓮子・飯島綾子・志水辰三郎 韃靼人Ⅱ洪海星
ブブノフⅡ三浦洋平

装置Ⅱ溝口三郎 配光Ⅱ神尾耕三 効果Ⅱ和田清 監督Ⅱ水品春樹 演出Ⅱ故小山内薫 ①

これらの公演に参加した俳優のうち、汐見洋、友田恭助、田村秋子については、各々の追悼文が機関誌に掲載された。いずれも築地小劇場当初からの古参である。

汐見洋「小山内先生」

先生 私達は燈台を見失った船です。慈父に去られた孤児です。けれども私達はもう泣きません。泣いている場合ではありません。

① 水品春樹著『小山内薫と築地小劇場』一八九頁。

いま私達の任務は、先生が生前の御功績を辱めないように奮闘しなければならない事です。先生が最後の御仕事となられた築地小劇場の永続のために、先生の御遺志をついで、専心劇術に精進しなければなりません。私達はその覚悟です。固い信念を持っております。

先生、御安心してやすらかにお休みください。そして私達のこれからの仕事を見守っていて下さい。先生は永久に私達を導いて下さるに違いありません。

友田恭助「小山内おやじ」

いま小山内先生の『犬』を放送して帰ったばかりです。放送局で大辻司郎氏に会って、いろいろ先生の話のあった末、「あなた方にはお父さんだから、これから先が大変でしょう」と云われた。

「お父さん」―実際我々にとってはお父さんだ。私達はよく陰で「小山内おやじ」と云う名称を使って話をした。・・・演出をされても、たいしてほかの演出者のようには、いろいろと私達に細々とは教えて下さない。ただ急所をこうしろ、ああしろと云われるだけだった。青山先生に手ほどきされた私としては、すこしもの足りなさを感じた事があった。・・・

しかし四年と云う長い間お付き合いしていると、本当の先生のエラサが分って来たように思える。先生と云う方はそれ程大きな方なのだ。我々カケダシの人間にはとても分らない大きなものを持って居られたのだ。それにどうだろう。先生はもう居られないのだ。永久に、いい意味での「小山内おやじ」と云う言葉を、壁一重隣りで云う事は出来なくなったのだ。・・・

小山内先生が逝かれて、まだ今日で二七日だ。でも、もうとても淋しく頼りなくてしかたない。我々はどうしたらいいのか？他のものなら、どうなりこうなりして、代わりは出来る。しかし、先生の代わりは日本にはない。学者で、実家で、経験家である先生の代わりはとても居ない。

田村秋子「小山内先生」

あのパイプをおくわえになった、少し肩に癖のある先生を、ホリゾントの後、舞台の袖、楽屋、さては劇場中どこを捜しても、もう決して御見掛けすることは出来ない、そう思うとたまらなくなりました。

『どん底』の二幕目の唄がはじまって、『桜の園』の夕暮れが来ても、『三人姉妹』の大詰の兵隊が行きすぎても、『ワーニャ』のこうろぎが鳴きだしても、先生はなんとも云っては下さらないのです。そうして我々はもうあの先生をお探しすることは出来ないのです。

情けないことです。どうしようもない気持が私をただ泣かせます。さうして私の貧弱な人生観を変えようとさえします。一人歩きの出来ない私は全く困惑します。そうして先生の偉大さを深く感じるのです。先生御存命の頃がなつかしめます。

しかし、この後いつまでも世の中は我々を甘やかしてはけません。私共はいよいよ一人立ちの仕事に向わなければならぬのです。今までの我儘の代わりに苦しまなければなりません。私はそれは恐れないつもりです。覚悟して居ります。どうしても先生の御意志を徹さなければなりません。

我々築地のすべての人が、小さな力を合わせて一緒に進まなければ、駄目だと思えます。背後に先生の偉

大なる影を負って。

①

土方与志による追悼文はかなりの長文であって、小山内薫の急逝と最後の日々を語る最初の部分をさきには提示した。今後に関する劇員の不安と覚悟に合わせ、ここでは小山内亡き築地を憂慮する最後の四半を転記する。

土方与志「謹んで小山内薫先生を追悼す」(続)

今後築地小劇場の運動を如何にして進展せしむべきかは、築地小劇場全員に課せられた重大なる課題である。顧みて築地小劇場四年半の足跡を思うことは、またこの際我々のその課題を解く鍵であらねばならない。

日本の新劇運動は過去三十年前、小山内先生、市川左団次氏、或いは坪内博士等の大先輩によってその基礎を置かれた。その消長は挙げるに暇ないが、ついに初期の目的とは遠く、劇界の大道を闊歩し得るまでには行かなかった。特に大震災以前の新劇運動はその当初の運動に参加した人々が逐次的にこの運動を見捨て、新劇としては極めて少数の愛好者が小範囲の観客を対象とする自慰的な運動に墮していたのだ。

築地小劇場がその後を受けて創立され、それらの運動を斥けると同時に従来の新劇運動がいずれも殆ど企てなかった時代思潮を舞台の上に反映することを意図した。すなわち「私は一個の芸術家であると共に、一個の社会学者であり、同時にまた民衆のリーダーであり、社会改良家であるだろうと思えます。」小山内先

生の創立当時の言葉としてこうしたものもある。これを見ても先生の当時の意気を察しることが出来る。

我々同志は熱と精進とによつてその未熟な技術を補い、経済上の困難に堪え、あるときはあらゆる新興芸術運動に等しく課せられるところの暴虐に対抗して、ようやくあまたの戯曲を上演し、その存在をつづけてきた。かくて慥かに築地小劇場は日本の文化の一面に寄与することが少くなかった。

しかし、最近数年間のわが国の社会的生長に伴つて、果たして築地小劇場がその使命を遺憾なく果しつつあったか、あまりに演劇の実験室の殻の中に屈居し過ぎてはいなかったか、或いは経済上の困難と外部的な圧力の為に当然獲得すべかりし技能の錬磨を怠つていなかたか、これらの諸点に対して常に先生は我々と共に深く悩みかつ憂えていられた。

新劇運動は限りなく困難である。小山内先生なき後の我々築地小劇場員は、演劇のもつ使命を寸時も忘れることなく、新しき運動としてその最大の効果をもたらす得べき組織を結成し、絶えず社会との交流による新鮮な弾力的な技芸と鋭角的な正鵠な理解とを以て観客を待つべく努力したい。不断の研究と、観客層に対する目標の確立と、芸術の発表に対する責任の確認等を銘記し実践するときに於いて、初めてこの亡き同志の存在に対して信頼と同情とを持たれた築地小劇場現在の観客諸君の期待を裏切ることなく、同時に築地小劇場を永続進展させることができると信じる。

再び、小山内先生の死を謹んで追悼する。

①

① 『築地小劇場』第六卷第二号。一〇頁。

土方与志「謹んで小山内先生を追悼す」『演出者の道―土方与志演劇論集』三七一―三七二頁。